

DAY 2 社会をみる「視点」のバリエーションについて①

6/25(土)17:00-19:00

課題文献：

Bryman, A. (2016) “Social research strategies: Qualitative research and quantitative research,” in Bryman A. (ed.) Social Research Methods 5th ed, Oxford University Press.※購入不要（facebookページにて配布します）

→社会科学研究のためのさまざまな視点を概観する便利な一本。実証主義と解釈主義、客観主義と構築主義、定量的方法と定性的方法、そして帰納と演繹。

ねらい：

実際の論文や書籍においては、「自分はどのような立ち位置に立って研究をしているのか」ということは、議論されないことが多い。というのもこの種の問題は、論文を書くよりも前、調査を行うよりも前、つまり研究を開始する段階ですでに決着がついている問題であり、1つの論文の中ではすでに自明のこととなっているはずだからである。

しかし、残念なことに、この種の問題をしっかりと理解した上でみずからの研究を行っている研究者は多くないように思う。研究者としてどの立場をとるにせよ、自分がとらない立場について理解することは絶対的に必要になると、思う。

事前課題：

以下の点についてA4サイズの内紙に記述し、アウトプットし、2部（自分用と提出用）、持参してください。

（1）自分が知っている社会科学の理論を1つとりあげて、その概要を紹介してください

（2）その理論の、認識論的前提、存在論的前提、前提とする価値観などについて、考察してください。

=YH=> 言葉の用法について。

《researchという言葉》

論文中に頻発するresearchという言葉は、

- （1）（先行研究をレビューして、データをとって、分析して・・・という）広い意味での「研究」を指す場合と、
- （2）（先行研究のレビューなどが背後にあるかどうかに関わらず）データをとって、それを分析するところくらいまでを指す狭い意味での「調査」を指す場合とがある。

本論文においては、このうち（2）の意味に翻訳したほうが適切だと判断し、以下特に断りがないう限り、research=調査と翻訳している。なお、（1）の意味での「研究」については、本論文ではstudyという言葉が使われている（e.g. ◆17）。

《empiricalという言葉》

これも頻繁に登場する。科学の分類は一般的に形式科学と経験科学に分類される。

(1) 形式科学：

論理的な正しさ／間違いによって、それが正しいか否かを判断し、現実（経験）の有り様からはそれを判断しない科学 e.g. 数学、論理学

(2) 経験科学：

論理的な正しさを無視するわけではないが、現実の直接的な観察や経験によって知識を得るタイプの科学 e.g. 心理学、社会学、経済学、経営学、教育学、工学、生物学などなど・・・

→この論文でいうempiricalはこの(2)、つまり「現実を直接観察したり、経験する」という意味で用いられている。これは研究のアプローチが定量的であるか定性的であるかということに関わりなく、現実をデータという形で読み取り、分析するあらゆる研究を含む言葉である。

● チャプターガイド（本論文の主目的） ◆ 16

社会調査の中に入り込んでいる「考え方onsideration」のバリエーションを示すこと。

しばしば見られる、「量的研究」と「質的研究」の区別に関しても、こうした「考え方」との関連において精査すること。

より具体的には、以下の点を論ずる。

(1) 理論と調査の関係：理論が調査を導くのか（演繹的）、調査の結果として理論が出てくるのか（機能的）

(2) 認識論的epistemological問題：研究者が社会的世界（私たちの研究対象）をどう見るか

(3) 存在論的ontological問題：社会的世界の存在に対する研究者の基本仮定

(4) 調査戦略：量的調査と質的調査

(5) 価値観（研究者の信念に関わる部分）と、実際の調査実施に関する考慮

● イントロ

社会的調査の方法は、「社会的な現実をどのように研究（study）するべきか」ということに関するものの見方visionと密接に関わっている。

どのような研究方法を採用するかということは、研究者がどのように社会を見ているかということとの関係で決定されるのである。

また、特定の調査の方法やその実行は、より大きな社会科学の体系とも関わっている。

我々が手にするデータは決して、社会的にホットな問題であったり、あるいは社会科学の特定の理論に関連づける形で収集されるのであり、そこからの影響を免れることはできない。 ◆ 17 左

●理論と調査

どんな種類の理論があるか? ◆18

《DF》理論

=観察された秩序regularityに対する1つの説明 ◆18

=YH=>

全くのカオスではなく、一定の秩序をもって生起しているある現象に対して、それはなぜ/どのように起きているのかを説明するのが理論

理論は、まず、それが焦点を当てる範囲の観点から2つに分けられる

- (1) 誇大理論grand theory
- (2) 中範囲の理論middle range theory

=YH=>誇大理論と中範囲の理論の区別

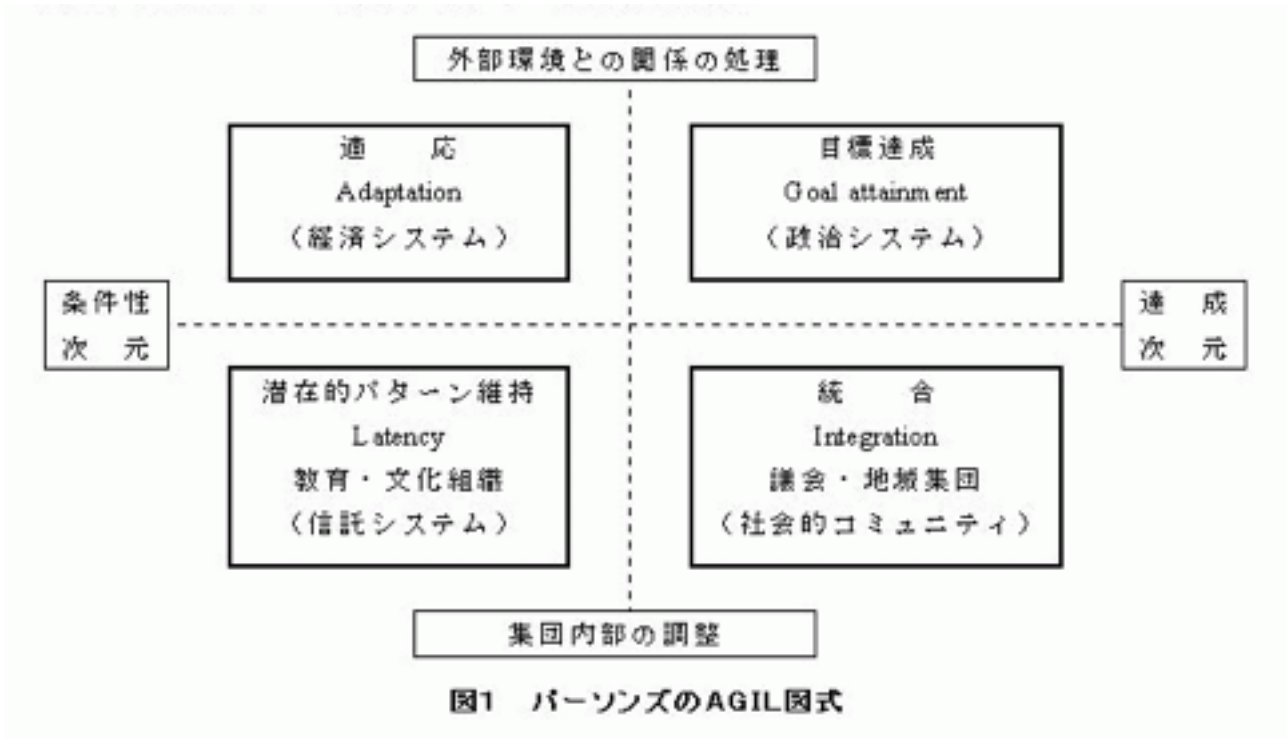
《パーソンズの機能主義理論》 ◆坂下(2002) 76-

詳しくは次回取り上げるが・・・社会学者のタルコット・パーソンズは、社会システムがなぜ維持存続するのかに関心を持ち、それを分析する枠組みを提示した。

パーソンズは、社会システムが維持存続するために、自ら充足しなければならない必要要件を「機能要件」と呼び、その要件には、

- (1) 適応: Adaptaion (外的環境に適応する手段を提供し、必要であればそれに働きかけて、それを統制すること)
 - (2) 目標達成: Goal attainment (システムの目標を充足・達成すること)
 - (3) 統合: Integration (システムを構成する単位(個人・集団・組織)同士の連帯を維持し、葛藤・分裂を予防・調整すること)
 - (4) 潜在的パターンの維持・緊張の処理: Latency (システムを構成するメンバーに価値システムを内面化し、時間や場面を通じて、メンバーの行為のパターンが一定なるようにすること)
- ※外部からは見えにくいので、「潜在」と呼ばれる

・・・の4つがあるとした。このAGIL4つの要件が揃う時、社会的システムは存続が可能になるということである。このうち、(1)(2)はシステムと外部環境との関係にかかわる機能要件であり、(3)(4)はシステムの内部に関わる気の要件である。この理論によってパーソンズが分析の対象にしたのは、特定の組織の存続だけでなく(e.g. ある企業の人事部門のAGIL)、社会全体の存続(e.g. 経済のシステム→A、政治システム→G、地域コミュニティ→I、教育や文化的イベント→L)をも説明しようとしたのであり、その意味でグランドなセオリーを志向していた。



《ロバート・マートンの機能主義理論》

これに対してロバート・キング・マートン（これもまた、次回詳しく取り上げる）は、中範囲の理論（◆坂下, 2002, 75）というものを提起し、パーソنزの誇大理論を批判した。

《DF》中範囲の理論

＝検証可能だが断片的な作業仮説（＝YH⇒あまりに狭い範囲）と、壮大だが抽象的で検証困難なグラント・セオリーとの中道を行く理論であって、一定範囲の社会的データに適用可能なもの

多くの場合、社会調査を導くのは中範囲の理論である。

中範囲の理論は、その定義の通り、「投票行動」とか「民族的な関係性」といった限られた領域における社会現象を説明することしかできないが、その限定生がかえって、経験的調査（社会的現実に関わるデータの収集を伴う調査）を導くガイドとなりやすい ◆19左

他方で、研究者の中には、誇大理論であれ中範囲の理論であれ、なんらかの理論に立脚せずに経験的研究を実施するものが少なくない。

そうした研究は、間違っているとは言わないまでも、（既存の研究に基づかずに、事実発見だけを志向するという意味で）ナイーブな「経験主義empiricism」に陥っていると言える。 ◆19

右、20左

＝YH＝>

ここでBrimanが批判しているのは、上記のような経験科学全般ではなく、(データの収集・分析という形でいった) 経験のみから、社会に関する知識を得ようとするという意味での「ナイーヴな経験主義」である。

「データこそが真実を映し出す！」とか「曇りのない目で現実を見ろ！」といった言葉は、一見正論にも思えるが、それはこれまでの研究蓄積を無視しているという意味で、科学的な態度としては好ましくない。

日本の経営学もまた、この種の経験主義に陥っていることを、少し違う角度から指摘したのが以下の文献。

→沼上幹 (2000) 「われらが内なる実証主義バイアス」 『組織科学』 Vol. 33, No. 4, pp. 32-44.

ただ注意が必要なのは、これはデータから理論が生成されることを否定しているわけでは決してないということだ。

その点が、次の論点になっていく。

理論と調査の関係には、「理論をテストするためにデータをとること」と、「理論を作るためにデータをとること」という2つがあるということだ。◆21

データは何のためにとられるか？理論をテストするためか、作るためか？ ◆21左

《DF》 演繹的な理論 《理論 → 観察/発見》

経験的な精査の対象となる(諸)仮説を導出するために、研究者はしばしば、特定の領域において既に分かっていることや関連する理論的なアイデアを援用することがあるが、この場合に使用される研究の出発点となる理論が演繹的理論 ◆21左

演繹的に理論を活用する研究は、おおよそ以下のステップを経る ◆21左

《理論 → 仮説導出 → データ収集 → 事実発見 → 仮説支持/不支持 → 理論の修正》

この最後のステップ(事実発見 → 仮説支持/不支持 → 理論の修正)においては、演繹とは逆のこと(帰納的なこと)が行われる。

具体的な発見事実から既存の理論のストックへのフィードバックが働き、理論に修正がかかるのである。◆21左

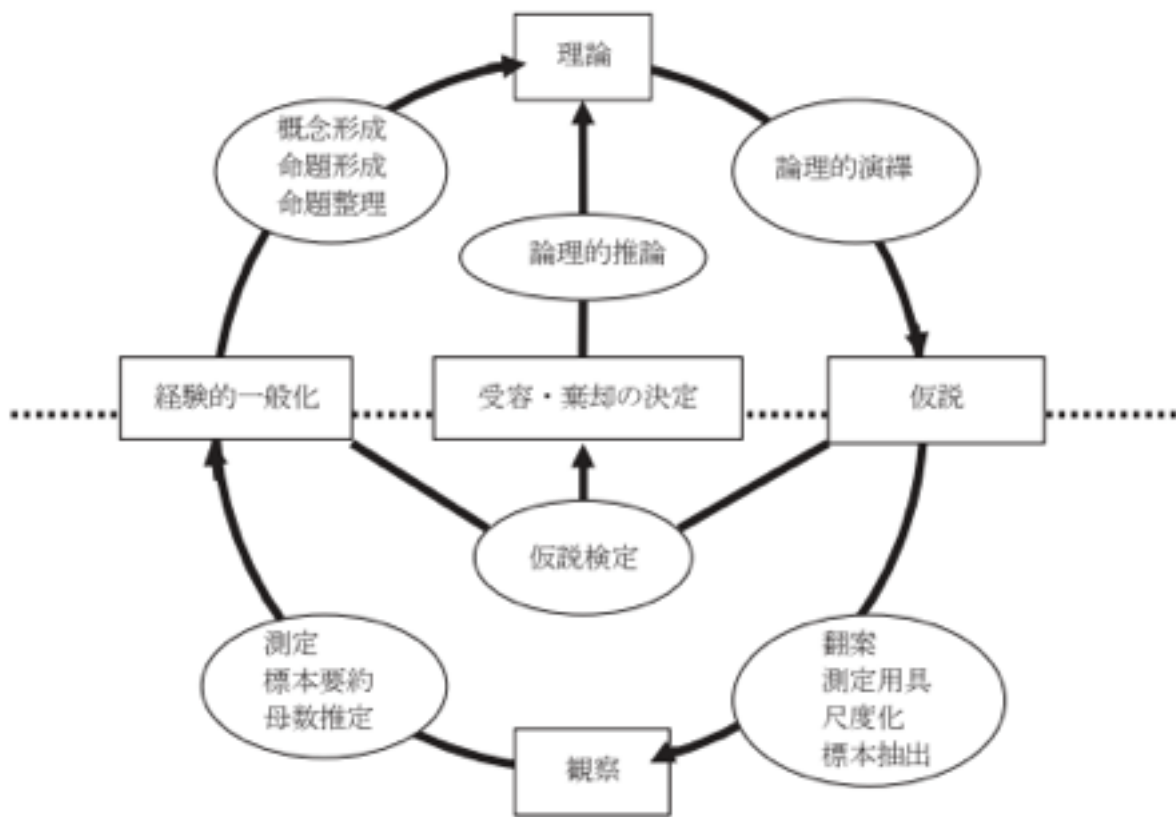
演繹的な研究は、通常、上記のステップがリニアに進むことが多い(常に、ではないけれど)。◆22左

《DF》 帰納的な理論 《観察/発見 → 理論》

理論が調査の結果として出てくることがある。データによって読み取った結果のなかから、一般化可能な部分を読み取り、それが他にも当てはまる理論になることがある。こうして出てくる理論が、帰納的理論 ◆22右

演繹的研究のなかに帰納的研究の要素が入り込んでいるように、帰納的研究にも演繹的研究の要素が入り込みうる ◆22右

たとえばグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、説明）のように、一度データから理論が生成されたのちには、その理論を前提とした演繹的研究が展開されることもありうる。 ◆2
3右



Wallace, Walter L., 1971, The Logic of Science in Sociology, Aldine, Chicago より

＝YH＝> グラウンデッド・セオリー・アプローチとは

抛り所となる先行研究がいったい存在しないような領域において、先行研究のレビューによらず、純粋にデータから理論を生成する研究方法。

「死にゆく患者と周囲の人間との相互作用」という看護学の領域において、GlaserとStraussによって提唱されたもの。

ただし、この手法の提唱者である上記の二人の間に、分析手法の考え方の違いから対立が生じたこともあり、現時点においても、この方法に関して統一的な見解が存在するとは言えない。

「データから理論を生成する」というコアの部分においては合意がありながらも、その具体的なやり方については、研究者によってその方法は微妙に異なるのが現状。

このあたりの事情については、木下康仁氏による一連の解説が詳しい。

木下康仁（2014）『グラウンデッド・セオリー論』弘文堂など

一般的に、量的研究は演繹的方法と、質的研究は帰納的方法と結びつきやすい◆24左

=YH=>

が・・・これはあくまでこれらが「結びつきやすい」ということであって、量的調査＝演繹的、質的調査＝帰納的というわけでは決してない。これは極めて重要。

たとえば・・・「未婚男性の年収分布」を調べたいとする。

この場合、もし「年齢と年収」にかかわる社会学や経済学の先行研究があるのであれば・・・

- (1) 「年齢と年収」にかかわる社会学や経済学の先行研究を調べて、「年齢が上がれば上がるほど、年収は高くなる」という仮説をたてて、それをデータによって検証する

・・・という研究戦略を立てることができる。もしそのような調査がなければ、

- (2) 年齢と年収の関係について、ひとまずアンケートをしてみて、分布を統計的に分析して、理論を作ってみる

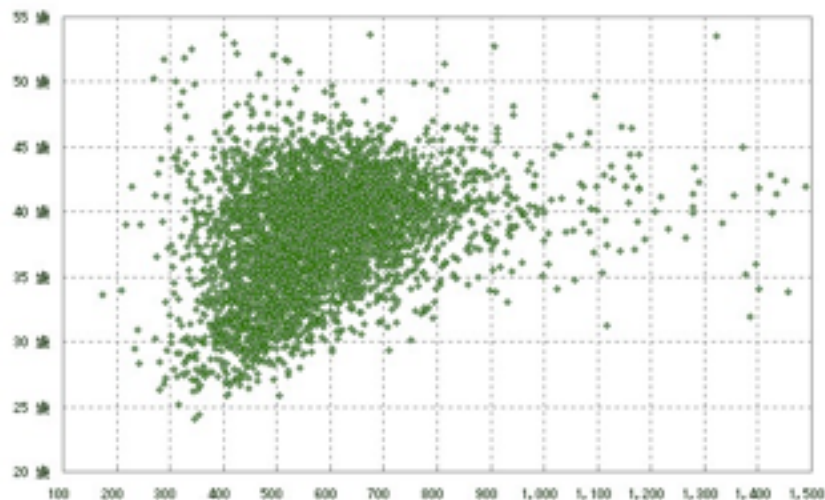
・・・というように、定量的でありながら、帰納的な戦略をとることができる。

あるいはまた、仮にそのような先行研究が既に存在している場合であっても、

- (3) 「多くの場合、年齢と年収の間には相関が存在するにもかかわらず、低年齢にして高収入を得たり、高年齢でも高収入に到達しないというような逸脱ケースはなぜ発生するのか？」という問いを立てたうえで、下記のような分布をまず確認して、その上で分布の外れ値の人にインタビュー調査をする

・・・というように、「演繹的でありかつ帰納的でもあり、量的でもありかつ質的でもある」という戦略をとることもできる。

忘れてはいけないのは、理論の種類（演繹か帰納か）と、実際に選択する調査戦略（量的調査か質的調査）とは、緩やかに関連はするが基本的に別の次元の問題であるということだ。



野村総合研究所の調査より

● 認識論的epistemological考察

● 存在論的ontological考察

=YH=>

※この部分は、あまりにもさらっと書かれてしまっているのので、Burrell and Morgan (1979) にしたがって服部が補足する。

この点については、次回の(坂下, 2001) でしっかりと扱われるので、今回の復習だと思ってお読みいただきたい。

・・・研究者が社会現象を研究するとき、誰もが特定の「ものの見方」をするものである。言い換えるならば、研究者は誰も(そして日常を生きる生活者の誰も)が、「社会を(そしてその構成メンバーである人間を)どのようなものと捉えるか」ということに関して、ある一定の枠組みを持っており、その枠組みを通じて社会を見ていることになる。

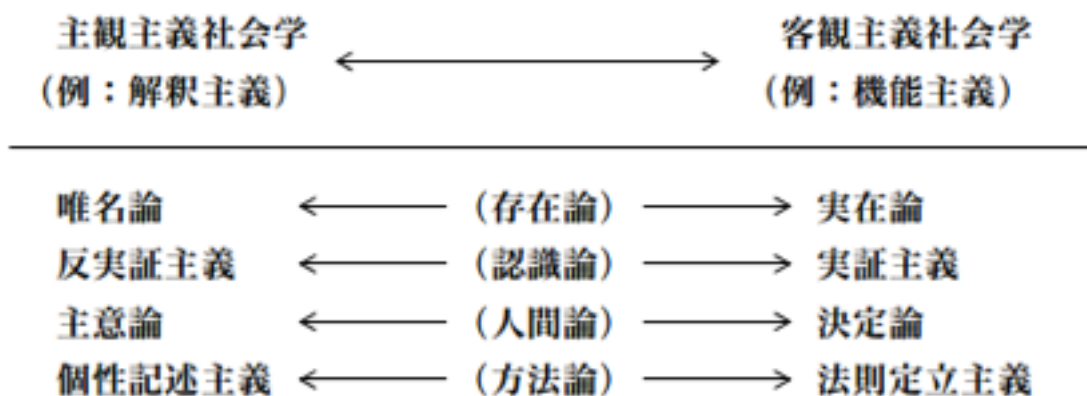
その枠組みが違えば、たとえば「横浜国立大学の国際化」という同じ現象についても、違ったように捉えられるし、違ったような調査が行われるし、当然、違ったような結論が導かれるわけである。

ではその「もの見方」には、どのようなバリエーションがあるのか?

それを整理する枠組みを示したのが、Burrell and Morgan (1979) である。

《Burrell and Morgan (1979)》

社会科学(彼ら自身は社会学者)は、(1) 存在論(2) 認識論(3) 人間論(4) 方法論という4つの次元によって、大きく分けて主観主義subjectivismと客観主義objectivismとに分類できる。



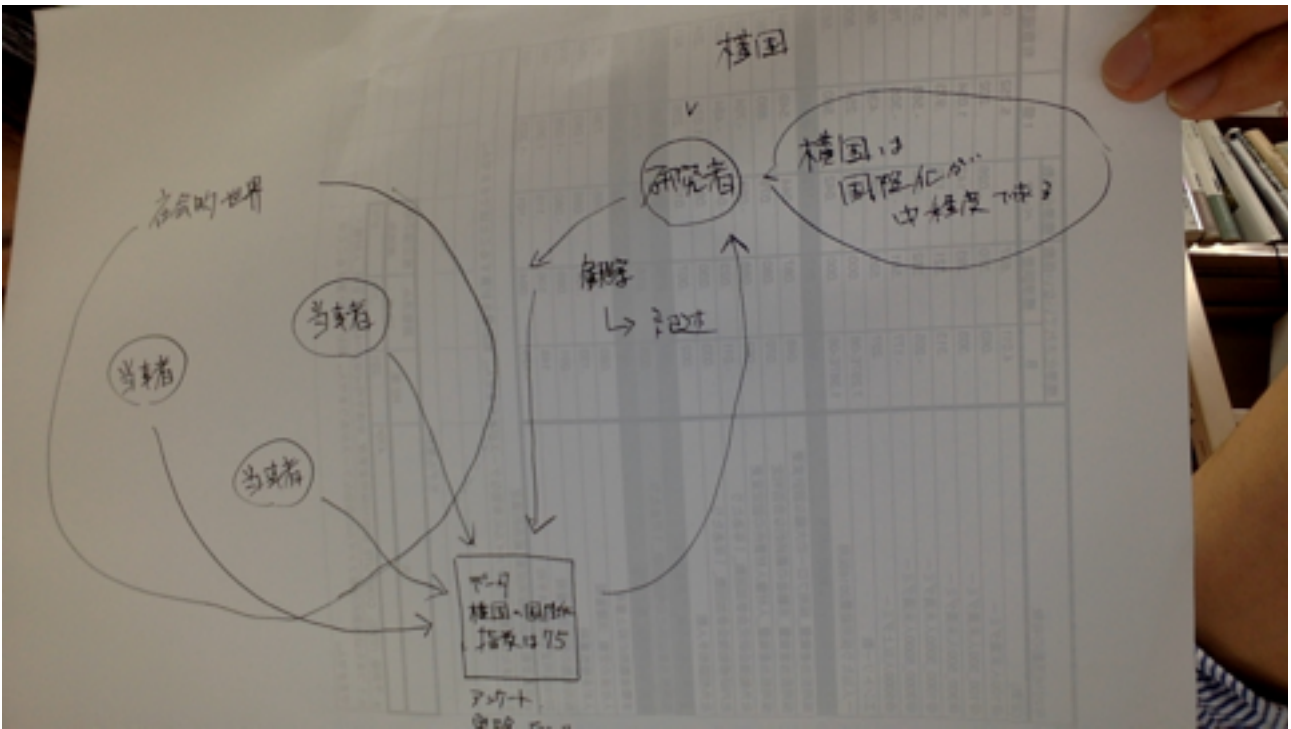
(1) 認識論epistemology：研究者が社会的世界をどう見るか（そして、それを観察することで導き出される知識というものをどのように捉えているか）

実証主義positivism

→研究者は、社会的世界の法則性や因果性を、その世界の外側から観察を通じて直接認識するものである。

→その際に用いるのは、自然科学で使われている方法（統計的手法、数量的手法など）である。

◆Bryman 25



解釈主義interpretism（あるいは、実証主義へのアンチという意味で反実証主義anti-positivismなどと呼ばれる）

→研究者は、当事者の視点に肉薄し、メンバーが物事をどう解釈したり意味づけるかにせまるものである。

→自然科学が対象とする対象と人間との違いは重要であり、社会科学の研究者は自然科学とは異なったアプローチを採用するべきである ◆Bryman 26

→ anti-positivismには多用なバラエティがあるが、1つの主要な理論的バックボーンは、フッサールの現象学phenomenologyであり、社会科学の世界でそれを展開したのがシュッツの現象学的社会学。

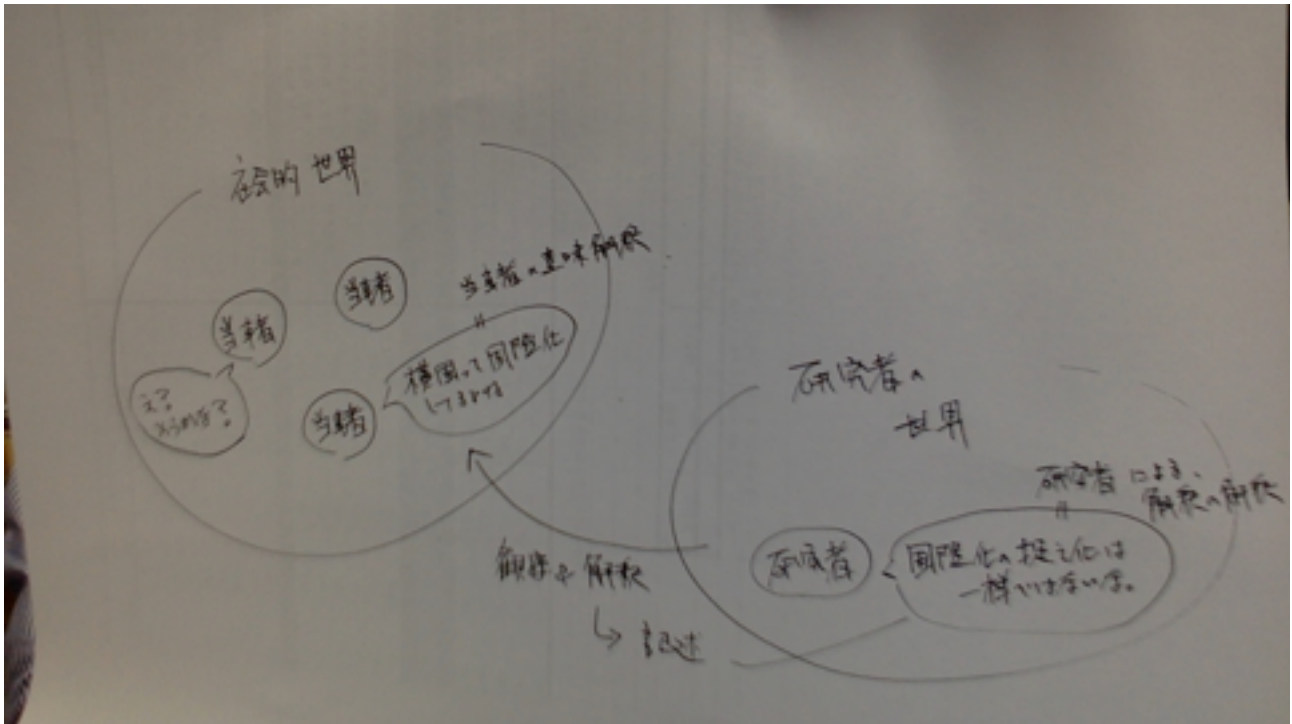
《シュッツの現象学的社会学のサマリ》

・シュッツによれば、実証主義者は、社会的な世界が特定の誰かの視点から独立して客観的に存在すると仮定し、それは科学という「第三者的」で「客観的」な立場から観察可能だということを暗黙の前提にしている

という。しかし実際には、科学者もまた「科学という世界」のなかにいるのであり、決して客観的な第三者ではない。したがって本当の意味で「客観的」な視点から、社会的世界をみることはできないはずである。

・だとすれば、研究者として誠実な態度は、社会的世界の当事者が社会をどのように見ているかということ（一次的構成）を、観察者として再解釈する（二次的構成）ことであろう。

→当事者が行っている社会の解釈を、解釈することが、研究者の役割である・・・という立場



(2) 存在論ontology：社会的世界の存在に対する研究者の基本仮定

実在論（Brymanでは客観主義objectivism）

→ 社会的世界は客観的実在物として存在するという立場
（当事者がどう考えようが、それはそこに「在る」）

唯名論（Brymanでは構成主義constructionism）

→ 社会的世界はその当事者の認識を通じて社会的に構成されたものであるという立場
（したがって、当事者がそのように認識しなければ、それが「在る」とは言えない）

(3) 人間論：研究者が人間をどう見ているか

決定論 → 人間の行動は、状況や環境によって決定されるものである

主意論 → 人間は自由意志を持って行動している

(4) 方法論：どのように研究をするか、そのアプローチ

法則定立主義

→ そこで起こっていることは、環境や状況要因が同じであれば他所でも起こることであり、研究者の仕事はそこに潜む法則性や因果性を明らかにすることにある。そのための方法としては、(主として) 定量的調査によって集めたデータの統計解析が適している。

個性記述主義

→ そこで起こっていることは、ほかならぬその組織において起こった個別的な事象である。だから研究者は、その組織のメンバーの視点に肉薄し、メンバーが物事を解釈したり意味づけたりするあり方に迫らなければならない。

=YH=>

注意が必要なのは、「アンケートを用いた量的調査＝法則定立主義に基づいた客観主義的方法」であり「インタビューや観察＝個性記述主義に基づいた主観主義的方法」ということではないということだ。これらは相互に結びつきやすいけれど、研究によっては、「アンケートをつかって、量的に企業の個性を記述する」ということまるし、「現場での観察を通じて、組織で起こっていることを、客観的に把握する」という研究もあり得る。

----- (例) 「横浜国立大学の国際化」という研究をする場合-----

客観主義の立場に立つ研究者は、

- ・ 横浜国立大学が「国際化」しているかどうかは、客観的な事実であり（存在論）、
- ・ それは研究者が外部から確定することができる（認識論）、
- ・ それは横浜国立大学のメンバーの行動や心理などが、状況や環境によって規定されていることであり（人間論）、そのため、
- ・ 「国際化」を定義し、それをなんらかの指標で計測し、定量的に分析することでそれを明らかにしようとする（方法論）

これに対して主観主義の立場に立つ研究者は、

- ・ 横浜国立大学の「国際化」は、あくまでメンバーが主観的に認識することでそうなるのであって（存在論）、
 - ・ メンバーがそれをどう捉え、どう認識しているかを探らないことには明らかにならない（認識論）、
 - ・ つまりメンバーは自由意志を持った存在であると捉えており（人間論）、
 - ・ 「国際化」を研究するためには、横浜国立大学の内側に入り、メンバーの物事の解釈にせまるしかない（方法論）
-

● 調査の戦略：量的調査と質的調査 ◆ 3 1

これまでに見てきた「理論の種類」や「認識論」「存在論」は、実際の調査戦略である「量的調査」や「質的調査」と、どのように関係しているか。◆ 3 1

=YH=>

ただし、実際には、「実証主義の前提に立った質的調査」といったものもありうるし、1つの研究において量的調査と質的調査を併用したりするケースもある。

→その場合には、1つの研究のなかで「認識論的前提」や「存在論的前提」が一貫するように気をつけなければならない。

=YH=>

量的調査と質的調査の具体的な内容、テクニカルな部分については、セッション4以降で扱う。

	量的調査	質的調査
理論の役割に関する考え方	演繹的、理論の検証が調査の役割	帰納的、理論の生成が調査の役割
認識論的前提	自然科学モデル、実証主義	解釈主義
存在論的前提	客観主義 ※であることが多いが、主観主義に立つ龍笛調査もある	構成主義 ※であることが多いが、客観主義に立つ質的調査もたくさんある

● 社会調査の実行に影響するもの

社会調査の実行には、さまざまなものが影響を与える。

- ①理論
- ②価値（観）
- ③調査実施practical上の問題
- ④認識論的視座
- ⑤存在論的示唆

②価値（観）の影響について

・・・研究者は特定の価値観（フェミニズムであるとか、自由市場信奉者であるとか、西洋的な価値観であるとか）から自由であるべきだという考え方は、現在では一般的ではない。

むしろ、研究者の行う調査は決して価値から自由value freeではないことをみとめ、それを内省的し自覚し、価値の混入を抑制することが重要になる、という立場をとるものが多い ◆ 3 5 右

実際に、研究領域の選択、研究課題の構成、方法の選択、研究デザインやデータ収集方法の考案、データ収集の実行、データの解釈、結論導出・・・といったあらゆるフェーズにおいて、研究者が持つ価値観の影響がある。 ◆ 3 4 左

もう1つの立場は、あえて意識的に、特定の価値に立脚した研究をするというものである。フェミニズム（性差別を廃止し、抑圧されていた女性の権利拡張を志向する思想・運動）の研究などが、これにあたる。 ◆35右

量的研究をするものは、みずからが価値から自由であると考え価値だしそう見られやすいが、この種の研究ですら価値から完全の逃れることはできない。

◆36左

価値観の影響は、さまざまな形で研究の中に姿を表すmaterialize。 ◆35左

たとえば質的研究を行っている研究者で、その調査対象になんらかの思い入れを持っている人は、その対象に対してシンパシーを抱きやすくなり、それが研究の内容に影響を与えることがありうる。

=YH=>コミュニティを尊重するコミュニタリアンが、人々のつながりを大事にする企業に行けば、自ずとそこにシンパシーを感じるようになるはず

③調査実施上の問題の影響について ◆36右

研究者がどのような調査戦略を選ぶかということは、
具体的には・・・

- ・調査戦略（量的or質的）の選択は、研究課題に従属する
ある社会現象に対してさまざまな要因が影響を与えているが、その相対的な重要性がわからない場合 → 量的調査が適している
ある社会や組織に属する当事者のもののみかたが知りたい場合 → 質的調査が適している
- ・過去の研究蓄積の多寡によって、選択する調査戦略が影響を受ける
その対象に関する過去の研究が多くない場合、質的調査が選択されることが多い。しかもより非構造的（質問内容、質問のポイントなどを事前に厳密に決めずに、当意即妙に調査を行うこと）な調査が適している。量的調査は、研究者が「事前に」想定した部分だけを捉える方法であり、重要な部分がどこにあるのかということ自体が自明でない場合には、これは適さない。
- ・研究しようとしているトピックや対象そのもののも、調査戦略に影響する
フリーガンや麻薬中毒者のような逸脱者の研究の場合、量的調査が難しいことが多い。